

2020年に向けて

作家
上田岳弘
うえだ たかひろ

僕の作家デビュー作は「太陽」というタイトルである。書き出したのは、たしか、2011年の終わりだったと思う。はじまりの一文を書き、その後は妙な恍惚感とともに筆が進んでいった——というのは慣用的な表現であって、実際にはキーボードをたたいた。

公募の新人賞に応募した作品だから、発表するあてがあったわけではない。しかし、書いたことの満足感が非常に高い作品で、書き終わった僕は充足していた。執筆後の余熱みたいなものがすぐに次の作品に向かわせた。

2作目に発表した小説は「惑星」というタイトルである。2020年に開催される夏季オリンピックが重要な舞台の1つになっている。ちょうど「太陽」で新人賞が決まった直後に東京オリンピックの誘致が決まって、それを題材にすることにしたので。誘致決定のあのニュースがなければ



時の調べ
Essay

「惑星」は書かなかった可能性もある。少なくとも、オリンピックについて作中で描くことはなかったような気がする。

作品の書き方は作家によってそれぞれだろうけれど、僕は世の中の出来事がなぜ今そのような起こり方をするのか、どうしても気になり作中に出てくることが多い。目の前にたまたまぼとりと落ちてくる現実的な出来事は、もちろん偶然が重なって出来るものであることを理解している。

誰かの意志が介入するという意味での理由なんてないとも思う。理由などなくとも出現した事象は、現実の人々に作用する。1つの出来事の裏側にはいくつもの現実的な出来事があって、連鎖の末に僕の目の前に現れているのだ。必然、と言ってしまえば味気ないし、運命と言えどここ陶醉が過ぎるような気がする何か。

2作目の「惑星」で2020年を作中で描いて、



今すぐ読むには
スマートフォンで
QRコードスキャン

それ以来、なんだか、その年、つまり2020年に向けて小説を書いている感覚がなくならない。芥川賞を取った「ニムロッド」でも直接は出てこないが、やはりぼんやりとまだ来ぬその祭りを思い浮かべていたし、対となる最新作「キュー」では「惑星」以上に2020年夏季オリンピックの主題が前景化している。

文学の世界でよく強迫観念(オブセション)と表現されるもの。作家がどうしてもこだわってしまふ事柄のことで、それが書き手の個性を形づくる。僕の場合、「2020年」は明らかにその1つで、そんな感覚が強いからか、世の中の雰囲気的にもそうなのは判断がつかないけれど、直前に迫っているのに2020年はなんだか遠いのだ。だが、もちろん、僕の住むこの惑星は太陽の周りを滞りなく回り続け、当たり前のような顔をして2020年はやってくる。

東京オリンピックの誘致が決まったのが2013年のことで、その時はまさか直前に元号が変わるなんて思ってもいなかった。2020年にオリンピックが無事開催されるのだとして、それは当然「平成」の時代に開催されるものだと思っていた。未来はいつだって予想の外にある。

2020年まで太陽の周りをあと半周である。



略歴
1979年兵庫県生まれ。早稲田大学法学部卒業。2013年、「太陽」で第45回新潮新人賞を受賞し、デビュー。2015年、「私の恋人」で第28回三島由紀夫賞を受賞。2016年、「GRANTA」誌のBest of Young Japanese Novelistsに選出。2018年、「塔と重力」で第68回芸術選奨新人賞を受賞。2019年、「ニムロッド」で第160回芥川龍之介賞を受賞。著書に「太陽・惑星」「私の恋人」「異郷の友人」「塔と重力」「ニムロッド」「キュー」がある。